

第5回 最優秀賞

『をかしき』未来

福岡県立三池高等学校 3年

野口 理沙さん

散っていく桜、早朝に光を放つ白い雪、夜空を彩る大輪の花火、街頭のイルミネーション、柔らかい絹のスカート、模様や織の繊細な着物、大海原に落ちていく青いサファイア、それは映画「タイタニック」の一場面―これは、私が、現代の「をかし」と呼べるものだと思うと思います。そこには、平安時代からずっと日本人が感じ続けてきた美もあれば、現代の科学技術が生み出した美もあります。しかし、クリスマスイルミネーションは縦の木がないといけないように、花火は夜空がないと輝けないように、どんな美でも、その根本には、自然の美というものが存在すると思っています。美しいものは、「をかし」の文字通り、人をしみじみと感動させ、私達一人一人の感覚に、何か、強烈な印象を残してゆきます。それは、時には、人の人生を変えてしまうような、大きなものに膨れ上がるほどの力さえ持っているように思われます。

私は、以前、染色や革芸をしている先生の所へ見学に行ったことがあります。その日は寒い日で、先生の学校に着くとすぐに温かいカプチーノを振舞って下さいました。そして、先日、海外から購入してきたという数枚の衣を見せて下さいました。繊細で美しい模様の一つ一つが、一瞬、触れたのかも分からなくなつたほどのその衣の柔らかさが、私の心を揺さぶりました。その一枚の衣にかけた職人の卓越した技巧や息遣いを、一瞬、感じ取れたような気がしたので。その時、以前テレビ番組で見た職人の姿が思い浮かびました。その職人は、一つの貝から少量しか採ることの出来ない

染料を、手作業で、丁寧に採っていました。その染料が生み出す色は、美しく、上品な紫で、糸にその色が染まる一瞬、私は息をのみました。最初は色が薄かった一本一本の糸が、職人の手により空気にさらされている間に、その美しい紫がますます映えてゆきました。私が先生から見せていただいた衣は、紫色でもないし、その職人が作ったやり方とももちろん異なっていました。しかし、本当に人を感動させる布を作るには、その背後に、確かな腕を持った職人の丁寧さや繊細さにかける思いが共通して必要だと実感したので。

先日、私は、十八歳の誕生日を迎えた時に、服飾関係の世界に進みたいとその進路を家族に初めて告白をしました。家族には、将来どのように自立してゆくのか、と心配をされました。確かに、「服飾」を勉強したところで、医者のように人の命を救うことは出来ませんし、科学者のように新しい発明をして、人々の生活を豊かにすることも出来ません。しかし、私が、今まで生きていて幸せを感じる所には、必ず人の心を揺さぶることの出来る服飾に関わる美の存在があったのです。もし将来、私が、人を感動させる側の人間になって、皆に必要とされる日が来れば、それは、この道を選択した最高の喜びになると思うのです。

心に決めた服飾の世界では、大輪の花火が大自然の夜空が在ってこそ美しく映えるように、私は、日常の、ひっそりとした、目立たないようにさえ思われる美の根源である自然そのもののイメージから生まれるものを大切にしていきたいと思います。そして、花火のようにきらびやかなものでなくてもかまわないから、平安時代から、ずっと日本人の心を伝えてきた源氏物語の絵巻物のよ

うな美しさを、過去から未来に橋わたしをしていけるような人になりたいと思っ
ています。

私は自分自身最高にわがままな人間だ
だということは分かっています。しかし
仕事においては、そのわがままを、自
分の喜びを最大に高めたいという欲望
に昇華させることが必要だと思います。
この沸きたつような喜びを発散できる
道に進むことを決心できたのも、今ま
で様々に進むべき道を示してくれた家
族や友人の存在があつてこそだと思っ
ています。

今、私がすべきことは、何よりも周囲
の人々に感謝の心を示し、私の進路を
より深く理解してもらふことでしょう。
私は、「大志」と呼べるかもわからないこ
のささやかな思いを語ることで、よう
やく、私の夢「をかしき」未来を探す
道の一步に足を踏みだすことが出来た
のです。

第5回 優秀賞

「正義」

福岡県立嘉穂高等学校1年

田村 麻菜実さん

中学の時に私は、「誠」という劇を見
ました。その劇では登場人物の一人一
人が自分の正義を持っていて、学生運
動と機動隊の衝突を通してそれぞれの
正義がぶつかり合っていました。そし
て、主人公は自分の正義を貫こうとす
るあまりに大切な人や友人を次々に失
っていきます。いったい何が、誰が
正義だったのだろう。

私はその劇を見終わった後、「正義と
はいったい何なのか」と考えるようにな
りました。

「誠」は、小さな戦争でした。その印
象からか、私は「正義」という言葉を聞
くと、戦争をイメージします。過去には
国家が国民に押しつけた正義のために
多くの人々の命が奪われました。日本
が戦争の道へと進んだ時も正義がふり
かざされ、アメリカで起きた同時多発テ
ロの時も、一国の正義のみが強調されて
いました。

私は基本的に正義という言葉を使う
時には、とても慎重になります。なぜな
ら、正義という言葉は不安定であり、独
りよがりな言葉だと思えるからです。

芥川龍之介はその著書『**珠儒の言葉**』
の中で、「正義は、武器に似たものであ
る。武器は、金を出しさえすれば敵にも
味方にも買われるであろう。正義も、理
屈さえつけければ、敵にも味方にも買わ
れるものである」と述べています。つま
り理屈を変えれば相反するものになっ
ても正義と呼べるということです。

正義とは、その時代の常識や多数派の
意見が定義となるため、流動的で可変
的なものです。時代によって流されると
いってもいいほどです。

同時多発テロを起こしたとされる国
の人々は、テロ行為を聖戦といい正義
なのだといいました。それに対してアメ
リカは正義のために報復するといいま
した。正義は立場によってもその意味が
変わるものだともいえます。

戦争をする人間にとって、自分たちが
正義であり、国のため、国民のため、相
手を正しく律するためには戦っている。
それは善いことであり、立派なこととし
てしまえます。一方、相手も自分たち
こそが正義であり、善いことを行っ
ていると信じています。つまり、同じ「**正義**」
というものを主張する者たち同士が戦
っているのです。そこには、相手の正義

を認めようとする気持ちは存在しませ

ん。正義を主観的にしか捉えられない時、正義は一つに減じてしまいます。だから、自分の正義が善いものであり、相手の正義は悪いものになってしまふのです。

広辞苑によると正義とは「社会全体の幸福を保証する秩序を実現し、維持すること」と書いてあります。幸福にするために行うことの方法や手段にはいくつもの考えがあり、またそれ以前に幸福感もそれぞれに違いがあります。だから正義も一つではないのです。抛り所が異なれば正義は異なり、それぞれの正義はその抛り所からのみ判断すれば確かに正義といえます。だから、大切なのはどちらが真の正義なのかということよりも、人間として行うべきことと、行つてはならないことを区別することではないでしょう。テロは行つてはならないことだし、多くの人の命を奪う戦争もまた行つてはならないことです。正義とはある意味自分の信念であり、それは人それぞれ違ふということだと考えました。

十六年間生きてきた私なりの正義とは、弱い立場の者に苦しい思いをさせないということ。他の誰かと自分の正義がぶつかった場合、自分の正義を押しつけることなく、だからといって自分の正義を安易に妥協したりせず、互いに納得のいくまで話し合いたいと思います。前にも述べたように正義とは変遷していくものであるからです。

今後多くの問題に当たった時、自分に正直な揺るぎない正義を多くの議論の中で貫いていけたら素敵だと思います。そのためには、日々自分の正義を様々な批判に耐え得るよう磨いていくことが必要です。

第5回 優秀賞

「働くことの意義」

大分県立大分雄城台高等学校 1年

広末 雅代さん

自分に夢というものはあるが、それは単にぼんやりとしたあこがれや理想に止まるだけであり、実現を強く望む姿とは大きくかけはなれているように思う。たとえ頭で必死に未来の自画像を思い描こうとしても、浮かぶのははつきりとした形すらない、見えない自分ばかりである。社会に出されても一人ですっきり生きていける。誰とでも穏便にやっけていく力もある。そんな口をたたける自信も強さも今の私にはないからだ。むしろ、自立して社会の厳しさの中で生きていくなんてとても無理なことだと妙に自信を持って断言している自分がいた。だが、学校での職業学習を進めるにつれて、そろそろ将来と向きあわなければならぬという現実に対し焦りを感じた。私は社会という枠の中で一体どんな役割を果たしていくのだろうか。どの立場から何人の人々と関わりあうのか。それを明確なものにしていくためには、自身自身を客観的に見つめ直し、世間に通用する人間へと形づくりをしなければならぬと思った。なぜなら働くということには私が想像する以上に甘くない世界だろうと思うからだ。時には自分の主張を曲げられても、ぐっとこらえる我慢が必要になる場面もあるだろう。又、幾度もの苦悩に出会っても常に前進していく強さだつて必要である。

私ができるように働くことへ不安を抱く原因は、いままでの自分自身の生き方にある。本当に変わらなければならぬ自分に衝突しても、私の力では無理だと自分の中で簡単にその問題を片付けてしまっていた。自分を持たず、他人の考

えばかりに流され、結局手元に残ったのは無力な自分だけだった。私のはつきりとした夢を持たないのも、ひきずってしまつた弱さの表れなのかもしれない。だが、これからはそんなわけにはいかないのだ。将来まで他人の意見に流されっぱなしでは自分の存在が消えてしまう。一歩社会へ出たら、自分が前進するためには世間へのわずらわしさからは逃げられないのだ。

そんな時、いわさきちひろさんの絵に目が止まつた。私は美術に興味があるので、将来は芸術方面の仕事についてみたいという望みはある。だが、絵を描く仕事というのは常に自分の能力を信じなければならぬし、しっかりとした考えを持つことも大事である。いわさきさんも自分の能力に疑いを持ち、何度も絶望的になつたそう。出版社から絵の線がぼやけているからここを直せと言われ、その通りに描けばお金が入るが、妥協したくないので断つたという。生活のためだけに自分は出版社の職人になりたくない。画家としてのプライドを曲げられなくても、そのようにはつきりと主張できる強さが私にはあるだろうか。私ならば自分に嘘をつかない生き方よりも、生活のためだけの仕事を選んだに違いない。いわさきさんのように誇りを持てるような深い考えが今の私にはないから。けれども結果的に残るものは何なのか。いわさきさんの場合、心いっぱい満たされた自信と喜びだつたという。他人の言う通りにしてもらつたお金などより、それはずつと価値あるものだと思う。「最後に私が得たものはお金だけだ。」と言うより、「最後に私が得たものは大きな自信である。」と胸を張って言えるほうがすごく幸福な人間だと思うからだ。

働くことの意義。それは何か？それは

或いは自分の生き方を確認するための重要な場であるかもしれない。またうまくいったら自分自身の生き甲斐につながる可能性も秘めている。仕事で新しい自分が発見できるのではないかと考えてみると、将来を想像することにいちいち目をそらしてばかりでは時間の無駄だという事によく気付いた。自分の未来なのだから私が一步を踏み出さなければ始まらないのだ。あいまいな理想をくつきりとした形に実現するには、今やるべき事と真剣に向き合う必要があると思う近頃である。

第5回 審査委員特別賞

私の夢の『夢』

福岡県立伝習館高等学校2年

渡邊 美穂さん

私には今、夢がある。それはCGクリエイターになることである。それを目指すようになったきっかけは、テレビのスクリーン上に映つた海との出会いだった。その海はコンピュータグラフィック(CG)で作られた映像だったが、本物の海の美しさと何ら変わらなかつた。それまでの私は、地球の大自然をここまでリアルに表現する方法があるとは知らず、それは私にとって大きな衝撃だった。そのときから、この世界にCGなるものがあると知って、意識してテレビや映画など様々な映像表現の中で探した。そして見つける度に、その美しさに感動し、本物とは違うもう一つの魅力があることに気がついた。例えば大自然で言うなら、本物は視界すべてを埋め尽くし、有無を言わさぬ迫力で人々を圧倒し感動させる。

それに比べるとCGには、そんなスケー

ルの大きさはないが、映し出すものの特長を的確に捉え増幅し、よりリアルに迫り、その映像に制作者の熱意と創意を感じる。それは私の胸を高ぶらせ、夢を感じさせてくれる。私はこの感動を他の多くの人にも伝えたいと思った。

いつだったか、私は「悲しみで人は死ぬ」という内容のテレビを見た。その中では人間がいかに精神に支配された動物か、ということを表していた。それは人間があるときは強いイメージに左右され、それによって死に至るケースもあるし、あるときは重い病気を克服するケースもあるというものだった。そこに私は人間の持つ神秘性と更なる可能性を感じた。

そこで私は、人は病気が治るイメージを抱くと実際に治ることがあるというケースに目を付けた。この事例から、これからの心理医療の分野で新しい治療法の一つに、CGによる映像が利用できるものかと考えたのだ。既に医療の世界では、CGを駆使した画像処理技術が導入され、検査、診断、手術のほか、患者に治療・手術方法を分かりやすく説明するための3次元CGなど多様に利用されているという。

もしある人が治癒力を高めるために、その精神を良い方向へ導くイメージを抱くことが出来たとしても、すべての人が同じように上手くイメージングできる訳ではないと思う。上手くイメージできない人には、イメージづくりのきっかけとして映像の表現力を最大に發揮できるCGが利用できると思うのだ。CGで具体的に映像化することにより、その映像が核となり、患者の自己治癒力を目覚めさせるイメージが膨らむ手助けとなる。CGは現実では起こせないことも映像化できる。病む人の精神を高揚さ

せるためのイメージ画像制作にあたっては、どんな注文にもこたえられるのだ。

最初に言ったとおり、CG作品には制作者の創意工夫が様々に込められたアートであると言える。それが病気を持った人に対して心理面から、生きようとする力、生命力を引き出してくれるプラスの感情、又は病気を克服するエネルギーを導き出すきっかけになる力を秘めていると感じる。患者の生きる力を喚起するCG画像を医療現場に提供することは、患者の生きようとする生命の躍動を、視覚から心へ、身体全体へと広げる新しいフィールドになるのではないだろうか。

今はCGアートの世界と医療現場には少しの関わりしか無い。しかし医療現場にCGで創られるアートを採り入れることにより、制作者の創作意欲の向上や、治癒率の向上などにも役立つのではないかと思う。CGアートの世界と医療のコラボレーションにとまどいを感じる人や反対する人がいるかもしれない。しかし、これからの時代、今までの常識にとらわれず、私たちがとって良い方向性を考え生み出していけるかどうか、重要だと思う。心理医療の分野ではまだ、だれもやったことのないCG映像の導入に挑戦すること。それが私の夢の「夢」だ。